



第27号

(年2回発行)

発行所

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

- P2 笛吹きの独り言
- P4 夫婦喧嘩のタネ
- P6 亀川文庫リスト
- P8 日々を大切に

- 森田保美
- 亀川幸郎
- 西川邦子

大島能舞台

創建百周年を迎えて

喜多流職分 大島政允

今年是新馬場町(現在の霞町)に旧大島能舞台が創建されて百周年の記念の年となります。この舞台は三間四方の舞台と五間の橋掛かりと二間四方の鏡の間を持った当時地方の舞台としては実に本格的な立派なものでした。初代七太郎の願望を二代目の寿太郎(当時四四才)が受け継ぎ、心血を注いだ悲願の結晶でした。建設に関しては有力なお弟子さんや後援者の協力を得ながらも金策に苦労した事等を日記に書き留めております。

大正三年四月の舞台披きには、十四世六平太先生を始め金子亀五郎師など多くの方々の来演を得、盛大な催しとなりました。能大島家としてはこの年が正に誕生の一步となります。残念ながら、この舞台は先の戦火で焼失してしまいました。そして現在の舞台は、昭和四六年に父久見が能舞台再建の悲願を果たしたものです。当時、全国でも珍しいビルの中に能舞台と椅子席の観客席を設置しました。

百年の時の移りと先人への思いを馳せ、本年十二月、創建百周年記念能を催すこととなりました。私は秘曲『木賊』を披かせて頂くこととな



仕舞「東北」大島政允(2012.4.15)池上嘉治撮影

り、孫の伊織を子方に老父の子を思いやる心情を情感深く演じることが出来ればと思っております。

また、息輝久は塩津氏の指導のもとに芸道に励んでおりますが、この機会に獅子を許され、師と共に連獅子を披露させて頂きます。

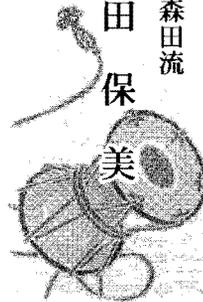
世阿弥の言葉に『家、家にあらず。継ぐをもって家とす。人、人にあらず。知るをもって人とす。』とありますが、今後は、輝久や伊織がしっかりと伝統を受け継いでくれることと期待しています。

皆様方の旧倍のご支援、ご鞭撻、宜しくお願い申し上げます。

笛吹きの独り言

能楽笛方 森田流

森田保美



この世に生を受けて四十数年、其の内三分の二を能楽の世界に身を置く。

能楽の世界は殆どが世襲制で出来ている。御多分に洩れずと言ったところだ。

能管の稽古にはある程度の制約があり、他の能楽師のように学業前からはいかない。と言うのも、能管の尺は決まっております、子供だからと言ってそれ様に、と言ったものも無く、要は笛に指がそぐわないからである。

只、耳だけはしっかり稽古を積んでいた様で、親から稽古をつけて貰う頃にはある程度の理解は出来ていた様である。職務としての身の置き場所も含めてだ。

今日、歳を重ねて緊緊と思うは、継続は力な

りであり、能楽の歩んだ道筋と同様である。

改めて先人たちが築いてくれた伝統に感謝をし、また、それを受け継いで行く事の厳しさを感ぜながら、日々精進と心に想うのである。

これは、私のホームページに載せている自己紹介の文で、つまらぬ私の独り言でございます。大変お世話になっております、大島師よりのご依頼により何か文章をという事で、恥かしながら書かせて頂きます。能楽の世界に身を置くというものの浅薄な私故、能楽の事を書くよりも、一人の能管奏者の独り言として書かせて頂きます。

舞台に出、いつも思うことがあります。笛は

もり た やす び
森田保美氏

能楽笛方 森田流
能楽協会京都支部常議員
京都能楽会理事
重要無形文化財能楽総合保持者
1963年春生れ
森田順人(父)より師事
初舞台 昭和49年 11歳 囃子「草紙洗小町」
初能 昭和53年 15歳 「岩船」
以後「鷲」「石橋」「狸々乱」「道成寺」「清経 恋之音取」を抜く
京都市在住



なかなか手ごわい楽器である、と。舞台の前日に稽古をした時、そこそこ納得のいく音色が出たとします。さて本番。泣きたくなるような音色しか出ない。苦しみながら一曲が終了。そして二曲目。不思議と先ほどとは打って変わって、そこそこの音色。その逆然り。やはり笛はなかなか思うような音色が出ない楽器のようです。稽古が足りない、と言われればそれまでですが。

かつてこのような事を聞かれた事がございます。小鼓・大鼓・太鼓などの楽器は湿度の影響を受けると聞きますが、笛はどうですか？と。

関係あるのです。女性の方々は敏感に感じられると思いますが、お肌が荒れる季節、若しくはエアコンの効いた室内はお肌にとって辛いですね。笛は息で鳴る楽器というのは皆さんご存知かと思えます。その息の出口、唇の乾燥により息が安定しない、さらには体内の水分量が不足するとこれまた唇の具合が悪くなる。ほんとうに言うことを聞かなくなってしまう。笛のせいではないのです。

梅雨時のムシムシするような舞台……いいですね。笛方にとっては。

そしてもうひとつ、泣き言。アシライ笛の難しいこと。

一曲の中に謡と同時進行しながら笛を吹くことがございます。「アシライ笛」と名づけられ

ております。アシライ笛の種類

類は数少ないのですが、或る時は風の音、或る時は鐘の音

花の散る様、雨の音、地獄の

底からの叫ぶ声、など様々な情景や心の奥底を笛の音で表現しなければいけません。大変難しいものです。また、ア

シライ笛は鳴っていたのか気づかれない様に吹け、と師匠である父よりの指導でした。

騒がしくならないようにとの戒めでしょうが、しかしながら存在感のある笛を吹きたいと思っております。生き方においてもうそふありたいと……。

だんだん弱音ばかりになってしまいました。が、「独り言」は正直でないといけません。

舞台が終わり、仲間と冷えたビールを飲む。最高のひと時です。

また、正直な「独り言」を言ってしまった……。



能「遊行柳」シテ 大島政允 ワキ 福王和幸 笛 森田保美
大島能楽堂 (2012.11.18) 池上嘉治撮影



夫婦喧嘩のタネ

ひろしま見所の会

代表 亀川 幸郎

かめかわ ゆきお
亀川 幸郎 氏

1943年10月、杉並区高円寺生れ(69歳)。45年3月、東京大空襲を間近に見た両親に連れられ、祖父の住む広島市大須賀町三樹園に疎開。原爆で祖父・親族9人を失う。喜多流粟谷益二郎師に師事した祖父の刷り込みが、64年慶応大学経済学部2年になって急に譁いたくなり、観世会に入部。坂井首次郎・音重両師に習う。(後藤得三師指導の慶応喜多会があったが廃部)。故粟谷菊生師には、“孫は観世か、なぜワシの所に来なかったんか”と叱られた。

00年9月、全国でも珍しい能楽振興団体「ひろしま見所の会」(現会員約100人)を立ち上げる。能楽情報のメルマガ発信や能楽堂案内、講座開催、広島での演能支援等を行う。マツダ定年退職後、05年4月、広島文化学園大学・短大でビジネスワーク論や「ひろしま学」(広島の能楽も含む)等を教え、12年度末に退任。

暮れも押し詰まった二〇一二年末、書棚や書籍(約二〇〇冊)等を大島能楽堂に運び、本を並べました。備忘録のような内容ですが、寄贈に至った経緯は以下の通りです。

マツダ入社後十年が経った、販売出向先の埼玉から広島本社に戻った一九七七年頃から、能狂言の新刊本や古本を次々と買って読み、書棚に徐々に溜まっていくのを見て一人悦に入りました。出向中によく観ていた能が観れなくなった反動かも知れません。

そして、バブルが弾ける直前の九〇年頃、買いは大きく変わりました。上京した際に能楽専門書店(檜書店他)に立ち寄り、読んでいない本があれば五冊十冊と選び出し、宅急便で広島に送って貰うようになったのです。

また、広島本通にある馴染みの古書店から電話が掛かってきて、〇〇が入りましたが、どうしましようか?とよく聞かれました。直ぐ見に行つて、気に入れば何万円でも即金で買いました。戦前のものや限定版の稀観本は自分が集めてやろう、という心境になっていました。

すると、最初は何も言わなかった大藏卿が、高い本や人形を買うのは止めて下さい。人形は置く場所がありませんし、三人の息子たちは全く能に興味がありません。貴方が亡くなったら、古本屋に二束三文で処分するのが関の山ですから、と言いはじめました。

九二年十月、総務部コミュニティグループ担当部長となり、広島でアジア競技大会があった九四年には、一世を風靡した日本初の人材バンク「マツダスペシャリストバンク」を創設しました。自分も『能楽解説』で登録したところ、

能のどこが面白いのか話して欲しいと頼まれるようになりまし。通常、一時間の講演なら十時間分のネタが必要と言われますが、面白話しや裏話を話すためには本の知識も欠かせません。大藏卿に多少遠慮していた私も、仕事で必要になったからと堂々と買うようになりました。

九七年四月、初の民間人として広島市ひと・まちネットワークに出向し、九八年十月十日、ボランティア総合支援センター所長になりました。そして、市民のボランティア活動や企業の社会貢献活動を促進するうちに、人にばかり勤めることに飽き足らず、自分でも〇〇年九月「ひろしま見所の会」を立ち上げました。見所の会は、インターネット時代に相応しく、メールアドレスを覚えてくれた人達に能楽情報を一斉送信し、一緒に能を観に行く会です。この能楽情報も、曲目の見どころや小書等の記述に誤りがあったはいけませんから、精査するための本が結構必要でした。

〇二年十月「サダコ」と〇五年八月「原爆忌」の二曲は、忘れることができない観世流新作能です。会員に情報をただ送るだけでなく、市職員も観る必要があると考え、市役所や区役所等を廻ってチケットを売り捌いたからです。新作嫌いの私ですが、佐々木禎子さんと同い年の被爆者でしたし、シテの梅若晋矢(現 紀彰)師や能楽座の故萩原達子さんからは、原爆がテーマのヒロシマの能だから、と言われました。これらの能で閑古鳥が鳴いたら広島島の恥になる、と思いましたが、切っ張り張りしました。

さて、肝心の夫婦喧嘩ですが、堂々と買えたのは八年ぐらいで終わり、「サダコ」の頃から

再発、本格化しました。拙宅の貞子は、仕事を口実にするにも程があります。これからは自分の小遣いでやってください」と言って、何日も口を聞いてくれなくなったのです。このダンマリ戦術には参りましたが、いよいよ敵を納得させる手を本気で考えざるを得なくなりました。それが一括寄贈です。

私は、これまで五十年間能を観続け、全国の能楽堂や能舞台を持った旅館巡り(大藏卿同伴)もしてきました。日本には、各流儀や公立、寺社、旅館、個人等の能楽堂が約一〇ヶ所(左渡島の神社約三〇ヶ所除く)あって、その半数を訪れていますが、資料室や文庫を備えた能楽堂は殆どありません。僅かな資料や本があっても、来場者に貸し出したり、手に取って読める場所は全くないのが現状です。

そうした中で特筆すべきは、個人所有の大島能楽堂です。能楽普及のための空間「榎木端」をわざわざ設け、能装束や人形、楽器、書籍、パネル写真等を展示し、映像も見られるからです。定期公演の時には食事や喫茶に使われますが、もともとは小中高生や留學生向け能楽教室を想定した場になっています。こういうことは本場に珍しいことなのです。確か〇六年三月、広島大島会がアステールプラザ能舞台であった時、大島泰子さんと衣恵さんに書籍を見ていただき、書棚ごとの寄贈を申し出ました。自分としては、能の本が自由に見える場が広島に欲しかったのと、夫婦喧嘩のタネをなくして穏やかに暮らしたかっただけでした。

個人的な話で恐縮ですが、昨秋思いも寄らぬガンを発症し、主治医からそう長くはないと

告げられました。自分なりに延命努力をしますが、こればかりはいつどうなるか分かりません。元氣な内に約束を果たさねばならなくなりました。

十月中旬に退院して直ぐ、本を小さな書棚に並べてみました。案の定、本が多すぎて収まりませんでした。それで、表紙が破れたものや分厚いもの等を選び分け、書籍リストを作成しました。図書館のようなラベルを背表紙に貼り、貸し出しも出来るようにしました。年四回の定期公演日にご覧いただきたい。貸し出しがなければ読めないと思ったからです。

これらの作業は、十一月末まで放射線を浴びた後の憂鬱な気分を吹き飛ばす、実に楽しい時間になりました。自己満足で集めた書籍が、これからは大勢の能楽愛好者に見て貰えるかと思うと、個人の絵画コレクションを公開する美術館オーナーの気分になりました。ぜひ、大勢の方々にお読みいただければ嬉しい限りです。

最後に余談ですが、主治医から、先日、お坊さんにガン告知をしたら、悟りを開いているはずの方が取り乱して大変でした。亀川さんはどうしてそんなに落ち着いておられるんですか?と聞かれました。

私は、原爆で九死に一生を得ましたし、こう見えても五十年間お能を観続けてきました。能には夢幻能と現在能があり、夢幻能は亡くなったシテがあつた世とこの世を行ったり来たりしますから、霊や死ぬことに慣れつこになったのかも知れません」と答えました。予想外の答えだったのか、目を丸くした医師の顔が忘れられません。

亀川文庫 寄贈書籍リスト

C. 能評家の著作

No.	書名	著者	出版社、発行所
C01	雪の能	大河内俊輝	わんや書店
C02	能楽万華鏡	大河内俊輝	能楽ジャーナル社
C03	能の見方・考え方・楽しみ方	大河内俊輝	皆美社
C04	《能》我は我なり	大河内俊輝	三月書房
C05	能と狂言の世界 対談五人の人間国宝に聞く	横道萬里雄編	平凡社
C06	能・狂言	横道萬里雄	岩波書店
C07	能劇そぞろ歩き	横道萬里雄	能楽書林
C08	能にも演出がある	横道萬里雄	檜書店
C09	観世流史参究	表章	檜書店
C10	昭和の創作「伊賀観世系譜」	表章	べりかん社
C11	能楽研究講義録	表章	笠間書院
C12	能謡鏡照	香西精	檜書店
C13	能に生きる歴史群像	権藤芳一	淡交社
C14	戦後関西能楽誌	権藤芳一	和泉書院
C15	能楽手帳	権藤芳一	能楽書林
C16	能の今昔	野々村戒三	木耳社
C17	能楽展望	堀上謙	たちばな出版
C18	能の表現 その逆説の美学	増田正造	中央公論社
C19	能の歴史	増田正造/小林真	平凡社
C20	能と唯識	岡野守也	青土社
C21	能に憑かれた権力者 秀吉能楽愛好記	天野文雄	講談社
C22	現代能楽講義	天野文雄	大阪大学出版会
C23	能の見える風景	多田富雄	藤原書店
C24	能・狂言なんでも質問箱	山崎有一郎/	檜書店
C25	昭和能楽黄金期 山崎有一郎が語る名人たち	山崎有一郎	檜書店
C26	花と余情 能の世界	馬場あき子	淡交社
C27	能の演出	三宅襄	能楽書林
C28	能の鑑賞講座一	三宅襄	檜書店
C29	能の鑑賞講座二	三宅襄	檜書店
C30	能の鑑賞講座三	三宅襄	檜書店
C31	能について考える十二帖	林望	東京書籍
C32	林望が能を読む	林望	集英社
C33	夢幻能	田代慶一郎	朝日新聞社
C34	中世芸能を読む	松岡心平	岩波書店
C35	能のドラマツルギ 一友枝喜久夫仕舞百番日記	渡辺保	角川書店
C36	能謡こぼればなし	藤城継夫	わんや書店
C37	能謡四方山ばなし	藤城継夫	能楽出版社
C38	能の話	野上豊一郎	岩波書店
C39	能 鑑賞のために	丸岡大二/	保育社
C40	能 神と乞食の芸術	戸井田道三	せりか書房
C41	現代能楽師論	長尾一雄	能楽書林
C42	能楽対談 第1集	丸岡明	能楽書林
C43	能楽対談 第2集	丸岡明	能楽書林

E. 能楽辞典・年表・研究書等

No.	書名	著者	出版社、発行所
E01	能楽全書第2巻 能の歴史	野上豊一郎編修	東京創元社
E02	能楽全書第4巻 能の演出	野上豊一郎編修	東京創元社
E03	猿楽能の思想的考察	家永三郎	法政大学出版局
E04	能と民俗芸能	宮尾しげお	檜書店
E05	能楽史年表	鈴木正人	東京堂出版
E06	明治能楽史序説	古川久	わんや書店
E07	謡曲作者の研究	小林静雄	能楽書林
E08	能・狂言図典	小林保治/森田編	小学館
E09	新版 能・狂言事典	西野春雄/羽田編	平凡社
E10	能楽大事典	小林責/西哲生	筑摩書房
E11	日本芸能史	樹下文隆他著	昭和堂

A. 能楽師による著作、聞き書き

No.	書名	著者	出版社、発行所
A01	能	金剛巖	白井書房
A02	能楽藝話	三宅襄(聞き)	檜書店
A03	六平太藝談	喜多六平太	竹頭社
A04	演能前後	喜多実	竹頭社
A05	演能初心	喜多実	竹頭社
A06	粟谷菊生 能語り	粟谷明生	べりかん社
A07	近藤乾三 ～能わが生涯	近藤乾三	日本図書センター
A08	近藤乾之助 謡う心、舞う心	藤沢摩弥子	集英社
A09	愚一思い出すまま	今井泰男	わんや書店
A10	桜間金太郎 能楽三代	桜間金太郎	白水社
A11	能と義経 シテが語る	桜間金記	光芒社
A12	花の翳	金春信高	岩波書店
A13	うたひ60年 紫雪おぼえ書	藤波順三郎	檜書店
A14	一期初心【能役者森羅万象】	26世観世清和	淡交社
A15	能狂言道しるべ	児玉信	主婦と生活社
A16	ようこそ能の世界へ	観世鏡之丞	暮らしの手帖社
A17	日本の名随筆 能	観世栄夫編	作品社
A18	評伝 観世榮夫	船木拓生	平凡社
A19	孤軍奮闘の能楽人生一代記 中森晶三	中森晶三	デントーアート
A20	五十六世梅若六郎 まことの花	梅若六郎	世界文化社
A21	梅若六郎家の至芸 評伝と玄祥がたり	梅若六郎玄祥	淡交社
A22	慶次郎雑談 なんとのおええ	片山慶次郎	檜書店
A23	能楽師宝生閑間書き 幻視の座	土屋恵一郎	岩波書店
A24	亀井忠雄聞き書き 能楽囃子方50年	土屋恵一郎/	岩波書店
A25	大倉正之助 鼓動	大倉正之助	致知出版社
A26	夢幻の可能性	山本哲也/	TTR能プロジェクト
A27	能への誘い 序破急と間のサイエンス	金春國雄	淡交社
A28	狂言お作法	茂山千作監修	ぴあ
A29	狂言三人三様 茂山千作の巻	野村萬斎/	岩波書店
A30	狂言三人三様 野村万作の巻	野村萬斎/	岩波書店
A31	太郎冠者を生きる	野村万作	白水社
A32	萬斎でござる	野村萬斎	朝日新聞社
A33	狂言じゃ、狂言じゃ	茂山千之丞	晶文社
A34	狂言役者一ひねくれ半代記	茂山千之丞	岩波書店
A35	狂言日和 茂山狂言の世界	橋連二	ぴあ

B. 世阿弥に関する著作

No.	書名	著者	出版社、発行所
B01	世阿弥の能	堂本正樹	新潮社
B02	世阿弥元清	高橋俊乗	文教書院
B03	世阿弥	小林静雄	檜書店
B04	世阿弥配流	磯部欣三	恒文社
B05	世阿弥は天才である	三宅晶子	草思社
B06	世阿弥の能芸論	西尾実	岩波書店
B07	秘すれば花	渡辺淳一	サンマーク出版
B08	能・狂言・風姿花伝	西野春雄/	新潮社
B09	世阿弥随筆	檜書店編集部	檜書店
B10	観阿弥と世阿弥	戸井田道三	岩波書店
B11	風姿花伝	馬場あき子	岩波書店
B12	観世寿夫 世阿弥を読む	萩原達子編	平凡社

G. 大版・変形版

No	書名	著者	出版社・発行所
G01	能入門 鑑賞へのいざない	増田正造監修	淡交社
G02	日本のこころ25 別冊太陽 能	表章 構成	平凡社
G03	図説日本の古典12 能・狂言	小山弘志著者代表	集英社
G04	図説日本の古典12 能・狂言	小山弘志著者代表	集英社
G05	日本の伝統芸能2 能と狂言	児玉信著	わんや書店
G06	別冊太陽 世阿弥	湯原公治編集	平凡社
G07	別冊太陽 薪能	高橋洋二編集	平凡社
G08	能の型	宝生英雄	わんや書店
G09	華の能 梅若500年	増田正造編集	講談社
G10	矢来能楽堂再建50周年記念 観世九皇会の歩み	観世九皇会 編集委員会	観世九皇会
G11	写真集 花は心 観世華雪 雅雪寿夫	鏡仙会編集	白水社
G12	芸三代 心を種として	関根祥六	小学館スクウェア
G13	週刊朝日百科 人間国宝24 能楽①	山田恭子編集	朝日新聞社
G14	NHK 日本の伝統芸能	日本放送協会	日本放送出版協会
G15	NHK日本の伝統芸能 能・狂言鑑賞入門Ⅱ	日本放送協会	日本放送出版協会
G16	大島久見奉寿記念 回顧写真集	大島久見	喜多流能楽教室
G17	茶能歳時記 茶と幽玄の出会い	筒井絃一・羅子	淡交社
G18	京都の狂言師 茂山千作	茂山千作	世界文化社
G19	和らい袋	茂山七五三監修	茂山狂言会
G20	狂言 茂山千五郎家	西山光子編集	婦人画報社
G21	お豆腐主義 狂言 茂山家物語	茂山狂言会	茂山狂言会
G22	萬狂言 披	松岡正剛構成	野村万之丞
G23	狂言集成	野々村成三/安藤	春陽堂
G24	別冊太陽No.79 道成寺	高橋洋二編集	平凡社
G25	瀬戸内寂聴の新作能 她 夢浮橋	瀬戸内寂聴	集英社
G26	演目別みる 能装束	観世喜正/	淡交社
G27	尾張徳川家 能楽名宝	徳川美術館/ 朝日新聞社	朝日新聞大阪本社
G28	開館十周年記念 厳島神社蔵 能面と能装束展	広島県立美術館	広島県立美術館
G29	源氏物語をテーマに能の幽玄美	永青文庫/ 毎日新聞社	毎日新聞社
G30	特別展 沼名前神社能舞台をめぐって	福山市の浦 歴史民俗資料館	歴史民俗資料館 活動推進協議会
G31	写真グラフ 長生殿(能舞台)	大本本部神教 宣伝部	大本本部
G32	国寶能舞台	北尾晴道	洪洋社
G33	能楽随想 亀堂閑話	12世梅若万三郎	玉川大学出版部
G34	弥左衛門芸談	豊嶋弥左衛門	能楽書林
G35	千野の摘草	森田光風	森田流直正歌行会
G36	能随筆 蔵に咲く花	瀧井孝作	求龍堂
G37	JAL機内誌AGORA 能・情念の舞	リチャード・ エマート	日本航空文化事 業センター
G38	社内報ひろガス 達人 粟谷菊生	広島ガス総務人事部	広島ガス
G39	伝統芸 能・狂言/文楽	読売新聞東京 本社宣伝部	読売新聞社

H. 入門書他

No	書名	著者	出版社・発行所
H01	能百番を歩く	杉田博明/ 三浦隆夫	京都新聞社
H02	能楽入門① 初めての能・狂言	山崎有一郎監修	小学館
H03	能楽入門② 能の匠たち	山崎有一郎監修	小学館
H04	梅若六郎 能の新世紀	氷川まりこ	小学館
H05	能への招待 I	藤城継夫	わんや書店
H06	能への招待 II	藤城継夫	わんや書店
H07	写真で診る 能の扮装	藤城継夫	わんや書店
H08	能謡100問100答 第1集	藤城継夫	わんや書店
H09	能謡100問100答 第2集	藤城継夫	わんや書店
H10	能謡100問100答 第3集	藤城継夫	わんや書店
H11	自然が舞台の野外劇 新能入門	福地義彦編集	婦人画報社
H12	大和路 能とまつりの旅	檜常太郎編集	檜 書店
H13	京都 能と花の旅	檜村亨子編集	檜 書店
H14	能を彩る 扇の世界	檜村亨子編集	檜 書店
H15	歩く旅シリーズ 平家物語を歩く	貝延典子	山と溪谷社

D. 能楽関係者の著作

No	書名	著者	出版社・発行所
D01	能楽秘話 北七太夫夏の陣	柳沢新治	東洋書院
D02	横からみた能・狂言	柳沢新治	能楽書林
D03	お能の周辺考 一 国際派への提言	木村欽一	こびあん書房
D04	散策 お能アラカルト	木村欽一	こびあん書房
D05	因州藩の能楽	田中 貢	総合印刷出版
D06	秋田県能楽謡曲史	渡辺豊治	秋田魁新報社
D07	なごやと能・狂言	林 和利	風媒社
D08	能楽師	アルメン・ゴデル	星雲社
D09	能の庭 能楽師とジュネーブの弟子	アルメン・ゴデル	檜 書店
D10	能楽師になった外交官	パトリック・ノートン	中央公論新社
D11	能楽史事件簿	横浜能楽堂編	岩波書店
D12	能を愛する	那須辰造	わんや書店
D13	能の素晴らしさ 狂言の面白さ	和久田幸助	わんや書店
D14	間、髪を入れて -能とオーケストラ-	星田良光	能楽書林
D15	能・歌舞伎役者たち	塚本康彦	朝日新聞社
D16	能・中国物の舞台と歴史	中村八郎	能楽書林
D17	新「ノ」と言わない能	村木泰仁	能楽ジャーナル社
D18	世襲について 芸術・芸能編	竹内 誠監修	日本実業出版社
D19	伝統芸能に学ぶ 僕と父親	光森忠勝	恒文社21
D20	織ひとすじ千年の技 -神陣織兄弟200歳の志-	山口伊太郎/	祥伝社
D21	数腕み能舞台 近代能楽側面史	西澤建義	図書新聞
D22	調と都市 能の物語と近代化	小野芳朗	臨川書店
D23	能の面 日本の美と教養22	中村保雄	河原書店
D24	能と能面の世界	中村保雄	淡交社
D25	続・能と能面の世界	中村保雄	淡交社
D26	カラ一能の魅力	中村保雄	淡交社
D27	平家物語	杉本秀太郎	講談社
D28	能の平家物語	秦 恒平/ 堀上 謙	朝日ソノラマ
D29	平家物語から浄瑠璃へ -敦盛説話の変容-	佐谷眞木人	慶応義塾大学出版会

F. 小説・随筆等

No	書名	著者	出版社・発行所
F01	菊慈童	円地文子	新潮社
F02	西行桜	火坂雅志	富士見書房
F03	秘花	瀬戸内寂聴	新潮社
F04	随筆集 雪舞い	立原正秋	世界文化社
F05	舞いの家	立原正秋	新潮社
F06	薪能	立原正秋	角川書店
F07	能の女たち	杉本苑子	文藝春秋
F08	華の碑文 世阿弥元清	杉本苑子	中央公論社
F09	人形芝居と能	三田村高魚	中央公論社
F10	観世三代秘すれば花 -歴史の裏にかくれた一族-	秋月ともみ	彩図社
F11	日本のたくみ	白洲正子	新潮社
F12	お能・老木の花 C4	白洲正子	講談社
F13	古典の細道 C6	白洲正子	講談社
F14	能の物語 C7	白洲正子	講談社
F15	世阿弥 花と幽玄の世界	白洲正子	講談社
F16	謡曲平家物語	白洲正子	講談社
F17	風姿抄	白洲正子	世界文化社
F18	雨滴抄	白洲正子	世界文化社
F19	名人は危うきに遊ぶ	白洲正子	新潮社
F20	文藝別冊 白洲正子	西口徹編集	河出書房新社
F21	お能の見方	白洲正子/ 吉越立雄	新潮社

日々を大切に

大島会・喜抄会会員 西川 邦子

広島と福山の真ん中のあたりに河内がありま

す。古くから大島久見先生、そして政允先生がお稽古に通われています。政允先生のお稽古は夜なので、私たち女性は出にくく昼間、近くの田村清先生にご指導して頂いていました。

平成八年夏、「体調が悪いので夏休みにします」と言われ、ご回復をお待ちしていましたのに、そのまま亡くなられ残念な事でした。

その後、田村レイ奥様にご心配いただき、平成九年、東京芸術大学卒業すぐの四月から衣恵先生にお稽古をして頂くことになりました。私は初めてお稽古して頂いた大村武先生からそれまでずっと男性の先生ばかりでしたので、女性の衣恵先生になって謡の発声が楽になり、仕舞の足運び、目の付け所、腕の角度など細かく

指導いただき、初心に帰って楽しいお稽古です。

当初は男性三人も一緒に十名ほどで、仲間内でおさらい会や公民館の文化祭などに参加していました。その後、メンバーも増減して今では私が一番古くなってしまいました。平成十一年の大島同門会の発表会から、福山の舞台に立たせて頂いています。

大島家の先生方のご活躍は海外にまで広がって、平成十二年秋には台湾国立芸術学院の客員教授となられ、集中授業をされました。その年、学生の発表会と先生の能公演を拝見に各地の社中の皆様とご一緒に私も台湾に参りました。学生の指導や舞台の準備でお忙しい先生方とは別に、私たちは観光や買い物と遊んでいました。先生方の能公演の前に、社中の仕舞や連吟の発

表があり、私は「楊貴妃」の連吟をすることになっていました。いつも通り本を持って出るつもりでいましたら、旅行中に『無本』と聞いてびっくり。ホテルで必死に覚え直しました。

台湾は日本統治の時代があり、年配の方達には今でも短歌や俳句など綺麗な日本語が残っているそうです。国家間の政治や経済では難しいことばかりですが人の心に根付いた教育、文化の力は強く、人々の心を結び付けてくれるのですね。台湾芸術学院卒業後、広島大学に留学された陳貞竹さんに久しぶりに昨年大島家でお逢いし、文化と教育の力を改めて認識しました。平成十八年春には平泉中尊寺にもお供しました。広い境内の戸外の能舞台で、謡の音が散ると思っていましたら、見所の周囲の太木に拾わ

れ舞台上に声が返ってきたのには感心しました。

平成十八年春には「草紙洗小町」の舞囃子をさせて頂き、平成二三年に紀恵さんがシテを勤められた、能「清経」の地謡をさせて頂くことになりました。「清経」の仕舞はやっていただけことは覚えていましたが、能はテンポも違い皆様にご迷惑をかけてはと、謡本のコピーを持ち歩きました。衣恵先生の吹き込まれたCDを頂いたのが直前でしたが、それにひたすら合わせて練習しました。当日、「笠の段」の仕舞がありました、それより「清経」の地謡のほうが気がかりで、地謡座から無事に立ち上がり、楽屋に帰った時は本当に嬉しくホッとしました。

昨春秋はおさらい謡会で屋島の志度寺へバス旅行、東京職分会自主公演も拝見に上京し、岡山後楽能や大島定期公演と能三昧でした。

最近はお稽古をされる方が少なくなりましたが、各地で能の催しがあり、能面を打つ方も増え、能の人口は多くなっているように思います。政允先生、輝久先生、衣恵先生皆様が国内外の多くの舞台を勤められるのは真におめでたいことです。私も年を重ね出来ないことが増えていくと思いますが、日々を大切に味わっていきたいと思います。



初謡会 2013.1.20 大島能楽堂 筆者 後列右から2人目



能「羽衣」シテ 大島輝久 大島能楽堂
(2012.9.16) 池上嘉治撮影



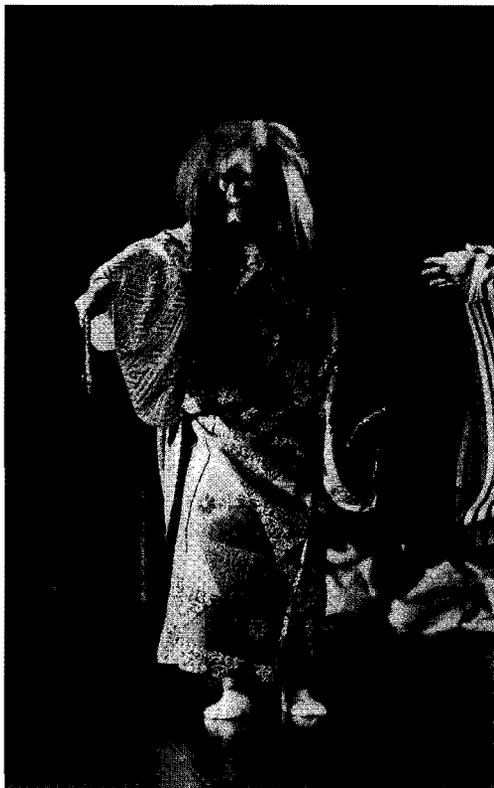
能「羽衣」シテ 大島輝久 大島能楽堂
(2012.9.16) 池上嘉治撮影



能「融」後シテ 大島政允 東京喜多能楽堂
(2012.9.23) 池上嘉治撮影



能「融」前シテ 大島政允 東京喜多能楽堂
(2012.9.23) 池上嘉治撮影



能「黒塚」後シテ 大島衣恵 岡山後楽園能舞台
(2012.11.3) 池上嘉治撮影



能「黒塚」前シテ 大島衣恵 岡山後楽園能舞台
(2012.11.3) 池上嘉治撮影



能「遊行柳」シテ 大島政允 大島能楽堂
(2012.11.18) 池上嘉治撮影

2013年 演能ご案内

2013年 大島能楽堂 創建100周年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
4月21日(日)	第232回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「玉井」 松井 彬 狂言「鬼瓦」 茂山 茂 能「花月」 大島 衣恵
4月26日(金)	絵 処 能	19:00	絵処アラン・ウエスト	前売 4,000円	能楽ワークショップ 大島衣恵・輝久
5月5日(祝)	お能で遊ぼう	10:30	リーデンローズ(練習室)	無料 要申込	おうたい「しようじょう」など
5月19日(日)	喜多流春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無 料	能・舞囃子・素謡など
6月1日(土)	燦 の 会	13:00	東京喜多能楽堂	正面指定 8,000円他	能「国栖」 大島輝久
6月16日(日)	第233回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「籠太鼓」 大島政允 狂言「舟船」 茂山千五郎 能「邯鄲」 大島輝久
7月28日(日)	福山八幡宮新能	18:30	福山八幡宮	前売 4,000円	能「鉄輪」 青木道喜
8月8日(木)	岡山後楽園夜能	18:00	岡山後楽園能舞台	未 定	能「羽衣」 大島衣恵
8月11日(日)	三和の森光信寺新能	18:30	光 信 寺	前売 3,000円	狂言「井杭」 井上松次郎 能「雷電」 大島輝久
9月15日(日)	第234回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	狂言「二九十八」 茂山あきら 能「三輪」神遊 大島政允
9月22日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	6,000円	能「養老」 大島輝久
10月12日(土)	広島県民文化祭	14:00	しまなみ交流館	未 定	能「巴」 大島衣恵
10月20日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無 料	素謡・仕舞など
11月16日(土)	平 和 能	13:30	アステール能舞台	要整理券 (ひろしん文化財団)	能「隅田川」 友枝昭世 狂言「萩大名」 野村 萬 能「紅葉狩」 大島政允
11月17日(日)	第235回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「景清」 金子匡一 狂言「呼声」 茂山七五三 能「葛城」 大島衣恵
11月19日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無 料	能学習発表・能観賞会
12月22日(日)	大島能舞台 創建100周年記念能	12:30	喜多流大島能楽堂	正面指定 12,000円 中正・ワキ正指定 10,000円 2階自由席 6,000円	能「木賊」 大島 政允 狂言「棒縛り」 野村 萬 能「石橋」 津 津 生 大島 輝久

編集デスクより

- ・この度、200冊以上の能楽関係書籍を亀川幸郎氏よりご寄贈頂きました。ご厚志に報いるために是非とも有効活用をさせて頂きたいと思えます。
- ・平成24年度文化庁伝統音楽普及促進事業で、DVD「能楽喜多流謡と舞」の知識編・実践編を制作致しました。試行錯誤の制作で不備な点が多々あり、今後改訂を重ねてより良いものと思っています。(大島泰子)

喜多流大島能楽堂

〒720-0814
広島県福山市光南町2-2-2
TEL 084-923-2633
FAX 084-923-8730
<http://www.noh-oshima.com>

おたよりありがとうございます

大島先生、加藤先生、法人会のみなさんありがとうございます。

ぼくは横目で横を見てはいけません。常に真正面をむくというところが分かりました。今までのぼくは困ったり不安だったりするとすぐ人にたよっていました。けれど、これからは、すぐに人に頼らず自分でできることは自分ですらうと思えました。

ぼくは能を通して自分で自分を信じるということを学びました。能は横目で横を見てはいけません。常に真正面をむくというところが分かりました。今までのぼくは困ったり不安だったりするとすぐ人にたよっていました。けれど、これからは、すぐに人に頼らず自分でできることは自分ですらうと思えました。



自分で自分を信じる

府中市立栗生小学校 六年生

ぼくは大島能楽堂での見学の時、足をけがしていたため舞台上に上がる事ができなかつたのはとても残念です。しかし、じつと見ていました。ぼくは改めて能のすばらしさに気がきました。能は堂々とかまへ、謡の声はのぼす所や声を低くすることによって、ぼくたちが観客の目をくぎづけにします。これが能かと思いました。ぼくはたくさん練習して、努力して、上手になつてやる、と心にちかいました。

はかまをはいた時になぜかとても合いいややる気がどんどん高まつてきました。はかまをつけていなくても一生けん命しようと思えました。ぼくはやる気の問題だと思ひ、はかまをつけていなくても一生けん命しようと思えました。